

# 令和元年度 学校経営計画書

石川県立金沢泉丘高等学校（全日制課程）

学校長 宮本 雅春

## 1 教育目標

心身一如の発達につとめて

真理を求め、勉学を第一義とすること

情操を豊かにし、自らの品位を高め、他者の人格を重んずること

正義を愛し、誠実にして、社会から信頼されること

## 2 中・長期的目標

### (1) 学校の現状

- ① 本校は、創設以来「心身一如」を校是とし、調和のとれた人材育成に取り組んでいる。「確かな学力」を身につけさせるとともに、次世代を担う心身共に健全で品位と良識あふれるリーダーの育成をめざし、保護者や県民から信頼される学校づくりを進めている。
- ② 大学進学に関して、県内有数の進学校としての実績を収めている。世界を視野に高い志を掲げて学習させるとともに、第一志望を実現させることをめざしている。
- ③ 平成15年度にSSHの研究開発の指定を受け、さらに平成28年度に四期目（5年間）の指定を引き続き受け、国際的に活躍できる科学技術系人材の育成をめざしている。
- ④ 平成27年度にSGHの指定を受け、グローバルな社会課題に関し、探究型学習を通して多面的に考え、多角的に行動する力を備えた、国際舞台上で活躍する人材の育成をめざしている。
- ⑤ 平成24年度に「いしかわニュースーパーハイスクール」の指定を受け、人文科学、自然科学の両分野における幅広い教養を身につけ総合力を備えた、国際性に優れた次世代を担うリーダーの育成をめざしている。

### (2) 生徒に関する中・長期的目標

- ① 「確かな学力」の育成  
進学実績の向上をめざし、確かな知識に基づいた深い学びにつながる質の高い教科指導を、ICTの活用や主体的・協働的な学習方法を取り入れながら、組織的に展開する。
- ② 豊かな心の育成  
「心身一如」の具現化に向けた有意義な体験が展開されるよう、部活動・学校行事・社会奉仕活動等の教育環境・設備を整え、次世代を担うリーダーに必要な人格の陶冶をめざす。

### (3) 教職員・学校組織等の望ましい在り方

- ① 指導力の向上と組織の活性化  
より効果的な教育活動を展開するために、研究授業や職員研修会をとおして教職員の指導力を高める。また、組織運営の合理化・効率化を推し進めることにより、教職員がワーク・ライフ・バランスを維持し、活力と創造力を十分に発揮することのできる職場環境を形成する。
- ② 開かれた学校づくり  
本校の方針や特色ある取り組みを、積極的に県民に伝え、広く協力・支援が得られる学校とする。また、PTAや地域社会とも連携することによって、本校の教育活動が有機的に展開することをめざす。

## 3 今年度の重点目標

創立126年目を迎える歴史と伝統を踏まえ、建学精神に基づいた教育活動の実践に努める。

- (1) 「勉学を第一義とする」をふまえ、質の高い学力を育成する。  
・ 一時間一時間の授業を重視する。指導法の研究・改善に努める。生徒の高い進路志望の実現を図る。
- (2) 探究活動の進化・発展及びその記録について研究を進める。
- (3) 「品位を高め、他者の人格を重んずること」をふまえ、よりよき集団づくりをめざし、絶えず自己研鑽に努める生徒を育てる。  
・ 挨拶の励行、体力の向上、環境美化、部活動・生徒会活動の活性化に努める。
- (4) 「正義を愛し、社会から信頼されること」をふまえ、生徒とともに開かれた学校づくりに努める。  
・ 保護者懇談会、授業公開の機会の拡大を図る。地域社会と連携したボランティア活動を推進する。
- (5) 組織運営・教職員の働き方の改善により、教育活動の効果を一層高める。  
・ 効率的で密度の濃い学習活動、部活動・生徒会活動の推進に努める。

令和元年度 学校経営計画に対する最終評価報告

石川県立金沢泉丘高等学校

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）および次年度の扱い（改善策）
<p>1 「勉学を第一義とする」をふまえ、質の高い学力を育成する。</p> <p>・一時間一時間の授業を重視する。指導法の研究・改善に努める。生徒の高い進路志望の実現を図る。</p>	<p>① 各教科での研究授業や自教科・他教科の授業見学などを通して、また生徒による授業評価なども参考にしながら、授業の質的な向上を図り、授業改善に取り組む。</p> <p>② 基礎学力の充実を図りながら、適切な模試や大学入試の分析の提供、学部別の説明会等を実施するとともに、難関大学を志望する生徒の意欲をさらに高める取組を、他室と連携しながら実施する。</p> <p>特に、3年生にはきめの細かい指導ができるよう、入試情報や模擬試験のデータ処理・分析等を工夫する。また、集団として受験に臨む意識を高める取り組みを行う。</p> <p>2年生には、高い志を持つとともに新テストにしっかり対応できるような集団作りを行う。</p> <p>SSH室SGH室等と連携した取組を工夫して行う。</p>	<p>「授業が充実しているか」の質問に対して、以下の①から④と答えた生徒の割合を算出し、順に4、3、2、1を乗じて、その値 <math>\alpha</math> を算出する。</p> <p>①「よくあてはまる」                  ②「ややあてはまる」                  ③「あまりあてはまらない」                  ④「まったくあてはまらない」  <math>\alpha</math> の値が                  A 3.55以上                  B 3.50以上                  C 3.45以上                  D 3.45未満</p> <p>※ 4段階評価の基準                  ・よくあてはまる …4点                  ・ややあてはまる …3点                  ・あまりあてはまらない …2点                  ・全くあてはまらない …1点</p> <p>東京大学・京都大学および国公立大学医学科合格者の合計人数(重複可)が、                  A 40人以上                  B 30人以上                  C 20人以上                  D 20人未満                  ※現役生</p>	<p>[判定] A                  12月実施の生徒による授業評価3.62</p> <p>[判定] B                  東京大学 10人                  京都大学 13人                  国公立大学医学科 10人                  合計33人合格した。</p>	<p>分析（成果と課題）および次年度の扱い（改善策）</p> <p>・満足度指標は、昨年度同期の3.55、今年度7月の3.59と比較しても上昇した。他の質問項目の「授業に熱意や工夫が感じられる」割合と「ICT機器や学習教材の有効な活用」の割合が増加しており、これが授業が充実した理由と思われる。職員会議等で教員間での授業の教材の共有を呼びかけたことで、生徒にとって効果的な教材を提供することになり、この結果につながったと分析している。</p> <p>・今以上に満足度指標を上昇させるため、今後ますます重要視される主体的・協働的で、深い学びが行われる授業にしていきたい。そのために、研究授業や生徒による授業の振り返りなどを参考にし、さらに効果的な授業の進め方、教員間の教材の共有、適切な課題の提示、等について学校全体で工夫してすすめていきたい。</p> <p>・東大・京大・医学科説明会を6月、10月に行い、さらに難関大別模試（実戦、オープン模試等）を夏と秋に受験させることにより、難関大学志望者の集団作りと意識付けを行うとともに、意欲を高めることができた。</p> <p>・1月末から2月初めに東大・京大出願者に対して本番実戦テスト（河合塾・駿台）を受験させ、学力向上を図った。</p> <p>・大学入試センター試験前（R2.1.10時点）では、東大志望者29名、京大志望者43名、医学科志望者36名で（例年の同時期と比較して京大志望者がやや多い。）であったが、最終的に、出願人数は東京大学21人、京都大学30人、国公立医学科26人であった。それぞれの合格率は例年に比べて高かったが、東京大学の出願数が他の大学への出願者と比べやや少なかった。</p> <p>・上記の出願状況、合否結果等については、校内入試反省会にて分析し指導に生かしていく。</p> <p>・加えて、各大学卒業後のビジョンも踏まえ、学年集会や担任面談で生徒の東京大学をはじめとした上位大学への意識付けをさらに進めていきたい。</p> <p>・東京大学の出願数30人を目標にし、京都大学、医学科への出願者数もさらに増やしていきたい。</p>

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）および次年度の扱い（改善策）
1 「勉学を第一義とする」をふまえ、質の高い学力を育成する。  ・一時間一時間の授業を重視する。指導法の研究・改善に努める。生徒の高い進路志望の実現を図る。	③ ホーム担任は担当生徒に対し、年間6回以上の個別面接指導を実施する。また、学習時間調査の結果も踏まえ、家庭学習の定着を図る。	一年間の学年団の指導が、自分の学力や学習姿勢の向上に役立ったと考える生徒の割合が、 A 95%以上 B 90%以上 C 85%以上 D 85%未満	〔判定〕A 学校評価アンケートにおいて、 97.1%	・（参考）12月の「生徒による授業評価」では、項目①「充実度」が3.60であり、93.9%の生徒が、授業が充実していると回答。 ・ホーム担任の個別面談回数の平均は6.1回であり、家庭学習時間にやや課題が残るものの、安定した学力が定着したと思われる。
	④ ホーム担任は、年間5回以上の個別面接指導を通して、高い進路志望の確立を図る。また、学習時間調査の結果も踏まえ家庭学習の定着を図る。	一年間の学年団の指導が、自分の学力や学習姿勢の向上に役立ったと考える生徒の割合が、 A 95%以上 B 90%以上 C 85%以上 D 85%未満	〔判定〕A 学校評価アンケートにおいて、 96.9%	・（参考）12月の「生徒による授業評価」では、項目①「充実度」が3.57であり、93.9%の生徒が、授業が充実していると回答。 ・1年後の入試に向け、担任は面談を行い、個々の生徒の状況に応じた指導を行っている。また、教科毎で添削指導を開始し、生徒のさらなる学力向上を図っていく。
	⑤ 授業内容をより充実させるとともに、放課後補習および個人添削等を通して、生徒一人一人の志望や学力にあわせた指導を展開していく。	難関10大学及び国公立大学医学部医学科の合格者数が、 A 100名以上 B 90名以上 C 80名以上 D 80名未満	〔判定〕A 難関10大学95人、国公立大学医学部医学科10人 合計105人	・学年と教科、進路指導課が連携し、生徒一人一人の志望や学力にあわせた指導を展開した。授業、放課後補習、個人添削等を、分量、レベル、頻度等の面から工夫して行うとともに、タイミングをはかりながら個人面談や学年集会を実施し、モチベーションの向上やメンタル面へのサポートを行った。今後も将来のビジョンを持たせながら志望校合格への強い気持ちと、学力をつけさせる指導を進めていきたい。
学校関係者評価委員会の評価	・生徒個々によって、学力の差や教科の得意・不得意が生じてきていると思うが、きめ細かな指導を今後も継続してほしい。 ・生徒の進路実現において、大学入学のみならず卒業後も見据えた指導を今後も継続してほしい。			
学校関係者評価委員会の評価結果をふまえた今後の改善策	・全体指導とともに個に応じた指導を今後も進めていく。より効果的な習熟度別指導もさらに研究していく。 ・偏差値だけでなく、研究費や教員数など様々な数値を根拠にそれぞれの大学の特徴を研究し、生徒への進路指導に活かしていく。			
2 探究活動の進化・発展及びその記録について研究を進める。	① カリキュラムの中の科学的な課題研究活動を充実させることで、生徒の探究力・思考力・行動力の向上を図る。また、探究活動の評価や成果を蓄積し、個人が振り返りできるファイルの作成に取り組む。さらに、普通科普通コース理型クラスの課題研究活動については、より探究活動を意識した取組を実践する。	「『AⅠ課題研究Ⅰ』（1年）『AⅠ課題研究Ⅱ』『SⅠ課題研究Ⅰ』（2年）『AⅠ課題研究Ⅲ』『SⅠ課題研究Ⅱ』（3年）は、「探究力、思考力、行動力を高める機会になっている」の項目で、「よくあてはまる」「あてはまる」と回答するSGH主対象生徒の割合が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	〔判定〕B 普通科 (2,3年理型) 74.9% 理数科 (1,2,3年) 95.7% 全体 80%	・SGH第4期において3つの力「探究する力」「思考する力」「行動する力」の育成を掲げている。特に今年度は普通科2年普通コース理型クラスへの力の波及もねらってきた。例えば『SⅠ課題研究Ⅰ』において、選択探究実験を前期、後期で導入し、探究を深める取組を実施した。課題としてこの項目における普通科と理数科の差はまだ大きい。普通科でもポスター発表を行うことで行動力の育成を図るなど、次年度に向けて改善の余地がある。これらの科目が、生徒の探究力・思考力・行動力を一層高める取組となるように、今後内容の改善に努めたい。
	② 大学入試制度改革や学習指導要領改訂などを視野に、カリキュラムマネジメントの視点から、課題研究を中心とした探究的学習のプログラムの改善を図り、持続可能かつ発展的な探究型学習の指導方法を確立する。また、探究活動の評価方法や成果の蓄積などポートフォリオに対する研究も進める。	「SG探究基礎」（1年）や「SG探究」「NS探究α」（2年）「SG探究活用」「NS探究β」（3年）は、自らの考えを隠すことなく論理的に表現し、合意形成をする能力を高める機会となっているという項目で、「よくあてはまる」「おおむねあてはまる」とする生徒の割合が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	〔判定〕A 全体 92.0% 1年 89.0% 2年 96.1% 3年 95.1%	・SGH指定5年目の最終年度を迎え、SGHプログラムは概ね完成した。ポストSGHを視野に、持続可能な取組になるよう様々な環境整備を行っている。その一環として、課題研究のテキストを作成し、教員間での共通理解をはかりながらプログラムを展開している。 ・ほとんどの生徒が、自らの考えを論理的に表現することと協働により合意形成する力の育成に探究型学習が役立っていると感じており、カリキュラムが有効に機能していると評価することができる。 ・今後は、よりハイレベルな探究活動に導くためのプログラムの改善や生徒自身が自らの能力をメタ認知し、向上を目指すしくみを開発していく必要がある。特に、「質問力」を軸とした能力開発を次の研究課題と位置づけたい。
学校関係者評価委員会の評価	・活動内容を簡潔で分かりやすい資料を用いて、地域や企業等に発信するとよい。 ・生徒にとって探究活動プログラムは貴重な経験であり、今後も進化させてほしい。			
学校関係者評価委員会の評価結果をふまえた今後の改善策	・探究活動の指導法を深化させ、生徒の探究力、思考力、行動力を高めていく。 ・生徒が外に発信する機会を増やすとともに、その指導法を他校へ普及していく。			

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）および次年度の扱い（改善策）
3 「品位を高め、他者の人格を重んずること」をふまえ、よりよき集団づくりをめざし、絶えず自己研鑽に努める生徒を育てる。  ・挨拶の励行、体力の向上、環境美化、部活動・生徒会活動の活性化に努める。	① 各種の講演会を生徒の発達段階に応じて適正に開催し、品位を高め心豊かで、グローバル人材となる資質を育成する。	「講演会が知識や経験を学び、生き方を考える良い機会となっている」の項目で、「よくあてはまる」+「ややあてはまる」の割合が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	[判定] B 87.5%	・昨年度の92%には及ばず判定をAからBに下げたが、一昨年の85%を超えている。昨年はアニメ監督で本校卒業生の米林 宏昌氏を講師に迎えたことが満足度の高かった理由と考えられる。来年度もより充実した講演会を企画したい。
	② 基本的生活習慣の確立を図ることを目的に、挨拶の指導を徹底する。 ・場面に応じた、元気で明るくさわやかな挨拶 ・授業の開始、終了の挨拶 ・職員室等の入室マナー	場面に応じた元気で明るくさわやかな挨拶ができていると答えた生徒が、 A 95%以上 B 85%以上 C 75%以上 D 75%未満	[判定] B 91.1%	・昨年比+0.4ポイントであった。毎朝の挨拶指導等、継続的かつ組織的な取り組みの成果であると考えられる。 ・挨拶は、人と人をつなぐ大切なことであること、他者をリスペクトし良好なコミュニケーションを図るために必要なことであることを、徹底して指導してきた。生徒の様子は良好になってきているが、継続的に取り組んでいくべき課題でもある。
	③ 「いじめを絶対に許さない」学校づくりを推進するために未然防止の取り組みを行う。	他人の人格を重んじ、尊重する態度で接していると答えた生徒が、 A 98%以上 B 95%以上 C 90%以上 D 90%未満	[判定] B 95.5%	・昨年比△0.9ポイントであった。今年度も挨拶指導をとおして、他者をリスペクトし良好なコミュニケーションを図る方法について啓発してきた。 ・他者の言動を尊重し、承認する態度を育む指導を継続していきたい。
	④ 部活動等の活性化及び競技力の向上を図る。 部活動と勉学の両立（文武両道・文武不岐）をめざす。	県予選を突破し、ブロック大会以上の大会・行事等に出場した部活動が、 A 20以上 B 15以上 C 12以上 D 12未満	[判定] A 4月～1月の間、20の部活動が出場した。	・運動部、文化部ともに活発に活動を続け、県総体・総文、北信越大会、全国大会（インターハイなど）においても優れた成績を収めた。 ・後期（新人大会等）の結果で、新たに4つの運動部が北信越大会に進出した。
	⑤ 環境ISO活動を意識して、環境保全に配慮した生活となるようにする。 ・ゴミの分別、学校周辺のゴミ拾い、節水・節電	校内の環境保全活動に努めていると答えた生徒の割合が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	[判定] B 89.8%	・探究的授業のテーマに環境問題がよく取り上げられるので、生徒の環境保全意識は高まっていると考えられる。しかし、生活経験が年々減少する傾向にあり、日常で取り組むべき具体的な行動が見つけられず、自主性に課題がある。
	⑥ 読書と学習環境の整備に努め、学校図書館としての機能と魅力を高める。 委員会活動、購入図書の精選、広報活動、教科や調べ学習の場の提供などに努め、貸し出し冊数や入館者数の増加を図る。 悩みや問題を抱える生徒の早期発見に努め、教職員間の連携を密にしながら、生徒一人一人が希望を持って学校生活を送ることができるよう支援する。	1年間の図書の貸し出し冊数が、 A 4,500冊以上 B 4,000冊以上 C 3,500冊以上 D 3,500冊未満	[判定] B 4,147冊の貸出があった。昨年に比べ13%増加した。（2月末までの調査。）	・図書貸出冊数は381冊増加。1年生はオリエンテーション後の貸出数を増やしたことで授業での利用が増え52%増。2年生は大きく減り48%減。3年生は33%減。読書離れが進む中、読書の推進と同時に、授業や調べ学習での積極的な図書館利用をより働きかける必要がある。 ・入館者数は15%減で17,534名。授業や調べ学習での利用減少が要因。読書と学習の場としてさらに魅力ある図書館づくりに努めたい。 ・一方、貸出本の内容は新書やハードカバーの割合が多く、教養や専門分野に興味のある本校生徒の特色が表われている。
		相談室を利用した生徒による学校評価アンケートの「気軽に相談でき利用しやすい」の項目で、「よくあてはまる」+「ややあてはまる」の割合が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	[判定] A 93.1%	・昨年比+3.4ポイントであった。相談室を利用した生徒が全校生徒中203名であった。昨年の165名より増加した。（数字には、教科の質問や課題の提出、部活や掃除で相談室を訪れた生徒も含まれている。） ・今後も悩みを抱えた生徒やその保護者が、気軽に相談室を利用できる環境づくりに努めていきたい。
学校関係者評価委員会の評価	・勉学のみならず部活動の生徒の活躍も泉丘の魅力の一つである。 ・他者の人格を重んずる指導を今後も継続してほしい。			
学校関係者評価委員会の評価結果をふまえた今後の改善策	・授業はもちろん、部活動や様々な行事を通して、生徒の人間形成を進めていく。 ・他者を思いやる指導も継続していく。			

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）および次年度の扱い（改善策）
<p>4 「正義を愛し、社会から信頼されること」をふまえ、生徒とともに開かれた学校づくりに努める。</p> <p>・保護者懇談会、授業公開の機会の拡大を図る。地域社会と連携したボランティア活動を推進する。</p>	<p>① 保護者懇談会、PTA 活動、いしかわ教育ウィークなどを通して積極的に学校を公開し、保護者や地域住民との連携を強し、開かれた学校づくりをめざす。</p>	<p>今年度の「PTA 総会」、「いしかわ教育ウィーク」、「生き方講演会」の保護者・地域住民の来校数が合わせて、 A 1200人以上 B 1000人以上 C 800人以上 D 800人未満</p>	<p>[判定] B 来校者の合計が1,033名 昨年1,023名</p>	<p>・「PTA総会」の出席者は787名（家族含むと907名）、「生き方講演会」は35名、「いしかわ教育ウィーク」は211名の来校者があつた。特に「いしかわ教育ウィーク」は過去5年間で最多で、昨年より44名も多く、保護者や地域の方々の本校への期待や関心の高さがうかがえる。</p>
	<p>② 特別講義を一般公開することや、理科科1、2年生、SSH委員、SS部及び科学系の部所属の生徒が「金沢泉丘サイエンスグランプリ」、「創立記念祭における理科教室」等、自ら企画・運営・参加する機会を増やし、内容を充実したものとすることで、科学教育の面から地域に貢献する。</p>	<p>「理科教室や金沢泉丘サイエンスグランプリに参加して、どう思いますか」という質問に対して「大変良かった」と回答する理科教室等の参加者の割合が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満</p>	<p>[判定] C 70.0%</p>	<p>・理科教室について、参加して「大変良かった」と回答した参加者（約700人）の割合が65.6%であつた。 ・理科教室は例年通り、企画・準備・運営を全てが生徒が行つた。外部参加者からの評価も、来場者のほぼ全員（95%以上）が、高校生が指導する取組を「良いと思う」と回答しており、生徒の主体性、コミュニケーション能力の向上につながつている。 ・本校独自の科学競技会である「金沢泉丘サイエンスグランプリ」は今年度3回（9/7, 11/16, 2/8）実施した。SSH委員および有志の生徒が運営を行い、特に第3回は金沢子ども科学財団と共催で、企画から運営まですべてをSSH委員が担つた。参加者アンケートでは3回の合計（約100人）で、「参加して大変良かった」とする生徒の割合が96.0%であつた。今後も科学教育の面から地域に貢献するため、このような取組を拡充していきたい。</p>
	<p>③ 校内ネットワーク・ICT機器の利用環境の保守・整備に努め、校務の効率化と教育活動への活用を支援するとともに、情報資産管理システムの適正な運用を図る。</p>	<p>教員アンケートにおいて、「校内LANの整備やコンピュータ・視聴覚機器の利用環境の整備によって校務の効率化と教育活動の質の向上が図られている。」という項目のよくあてはまるとややあてはまるを合わせた割合が、 A 90%以上 B 70%以上 C 50%以上 D 50%未満</p>	<p>[判定] B 82%</p>	<p>・SAMシステム運用により各種台帳が整備され、第1回棚卸によるハードウェア、ライセンス媒体の確認作業も終了した。 ・引き続きコンピュータ・ネットワーク利用環境の整備に努め、教職員の活動の支援を進めたい。</p>
	<p>④ 「学年だより」、「進路だより」等を通じて、保護者に学校の様子を理解していただく機会を増やし、保護者の学校行事への参加拡大につなげていく。</p>	<p>「学校からのたよりによって、学校の様子がわかる」と回答した保護者が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満</p>	<p>[判定] C 全体 74.6% 1年 72.8% 2年 75.4% 3年 75.5%</p>	<p>〔1年〕「学年だより」3回、「進路だより」9回、生徒向け「学年通信」2回発行。 〔2年〕「学年だより」3回、「進路だより」10回発行。 〔3年〕「学年だより」5回、「進路だより」9回を発行。 行事、生徒の様子、受験情報など提供した。今後もより充実した内容のたよりを提供していく。</p>
<p>5 組織運営・教職員の働き方の改善により、教育活動の効果を一層高める。 ・効率的で密度の濃い学習活動、部活動・生徒会活動の推進に努める。</p>	<p>① 業務の見直し、密度の濃い会議運営など組織運営の効率化、職場環境の改善、教職員の意識改革、時間管理の工夫等を進めることにより、教職員のワーク・ライフ・バランスをとり、教育活動の質の向上を図る。</p>	<p>ワーク・ライフ・バランスをとることにより、気力、知力、体力が充実し、一層効果的な教育活動を展開できていると回答する教員の割合が、 A 80%以上 B 60%以上 C 40%以上 D 40%未満</p>	<p>[判定] A 93.3% よくあてはまる39.2% あてはまる54.1%</p>	<p>・職員の勤務時間調査、月一度の定時退校日、夏季休業中の学校閉庁日の設定、計画的な部活動実施時間や部活動休養日等の設定など一定程度効果が現れてきた。今後も限られた時間の中での業務効率の改善や、ワーク・ライフ・バランスをとることへの意識の向上を図っていきたい。</p>
<p>学校関係者評価委員会の評価</p>	<p>・開かれた学校づくりに係る取組は評価できる。 ・働き方改革に対する教員の意識の高まりは評価できる。今後も実行を伴った多忙化改善を継続してほしい。</p>			
<p>学校関係者評価委員会の評価結果をふまえた今後の改善策</p>	<p>・保護者・地域に対して今後も学校の取組を発信していく。 ・教材の共有化や、会議の効率化など今後も具体的な取組を進めていく。</p>			